

## 大学体育における理論と実践の融合化

### ～ 理論と実践の融合化をめぐる諸問題と体育の「知」～

山本 教人（九州大学）

#### 1. はじめに - 科学的だけど評判の芳しくない授業 -

「理論と実践が融合化」した「体育」といった場合、我々が頭に浮かべる授業とは一体どのようなものであろうか。たとえば、九州大学では、平成6年度よりカリキュラムの大幅な改革を行い、形態や最大酸素摂取量、筋力、柔軟性の測定や各種トレーニング理論の理解とその実践などを内容とする授業を必修科目として位置づけてきた（詳しくは、「大学体育」第59号を参照されたい）が、多くの者にとっては、このような授業がそれとしてまず頭に浮かんでくるのではないだろうか。

（余談だが、平成8年度の「大学体育指導者中央研修会」で行った私たちの報告は、その後の大学体育の改善に少なからぬ影響を与えたものと自負している。他大学で行われている授業が、私たちのそれに、偶然とは思われないほどよく似ているからだ。）

ところが、こうした「融合化」を志向した授業は、それを行っている教師にも、受けている学生にもあまり評判の良いものではないようだ。

たとえば、

- ・それは「体育」ではない
- ・「体育」は理屈ではない
- ・理論に支えられた実践というが、それは「現場」の指導者がこれまで経験的にやってきたことと何ら変わりがないではないか
- ・何よりも指導に携わっている「理論的である（ありたいと願っている）体育教師」自身が「何かウソ臭い授業」だと思っている節がある
- ・もちろん学生の反応も思わしくない、などといわれたり思ったりしている（と、私は思う）

何故にこのようなことが生じてくるのだろうか。この問題について検討する前に、そもそも「理論と実践の融合化」とは一体何なのか、このことについて考えてみたい。

#### 2. 「理論と実践の融合化」とは何か

「融合化」とは、辞書的な意味では、「二つ以上の組織・成分が一緒になってよく交じり、全く元の組織・成分のあとをとどめていない状態になること。たとえば『核融合』」、とい

うようなものである。だから、「理論と実践の融合化」とは、「理論」と「実践」とが溶け合って全く新しい何かになることだ、ということができよう。しかしながら、「理論」と「実践」は、「体育」という授業において交じり合い、一体「どのような歓迎すべきもの」になるというのであろうか。このままではよく理解できない。

ここで少し目先を変えて、人間の認識一般について検討することで、「理論と実践の融合化」という問題に接近してみようと思う。さて、人間の認識について議論する場合、次の二つを区別して考えることが一般的である。

- ・「感性的認識」：知覚や感覚を通してなされる認識（プリミティブな世界や対象の認識）
- ・「理論的認識」：概念的思考による認識（科学的な世界、対象の認識）

（難解な哲学の議論に深入りするつもりはないし、その能力もないけれど、）これら二つの認識の関係について考えてみると、まず、感覚こそが事物認識の源泉であるということがいえる。あらゆる概念的思考は、人間の実践なくしては獲得できなかったはずだからである。この意味では、感覚（あるいは実践）は理性に先んずる。個々の断片的で原初的な対象認識から、我々は帰納法的にある客観的認識へと到達できるのだ（帰納法的理論構築の過程）。ところで、「感性的認識」が「理論的認識」の源泉であるとはいえ、「感性的認識」から合理的実践を導くことは不可能である。実践は、「理論的認識」によって方向付けられること（理論的演繹の過程）によってはじめて、合理的な実践となることができるからである。このように考えてみると、「理論」と「実践」は「相互依存」、「循環」の関係にあるということがまずは確認できるだろう（図参照）。

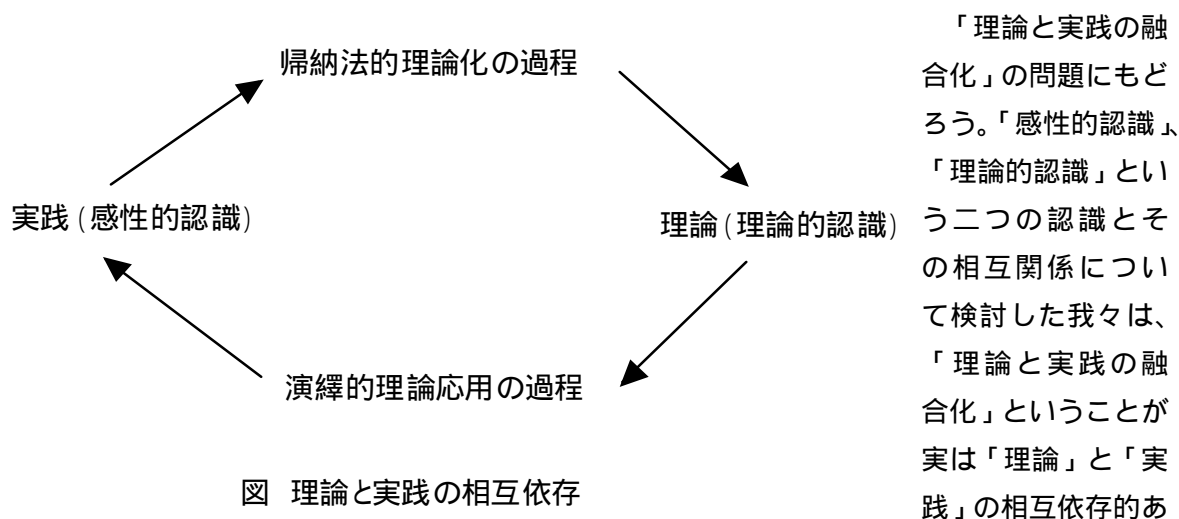


図 理論と実践の相互依存

り方を、換言すれば、「理論的認識」は「感性的認識」なくしてはあり得ないが、「感性的認識」のみでは合理的な実践を導き得ないという関係のあり方を言い表すフレーズではないかと考えることができる。もしそのように考えられるとすれば、「交じり合うこと」を意味する「融合化」といういい方は、「理論」と「実践」との関係を必ずしもうまく言い表していないことになる。

### 3. 「体育」における「理論と実践の融合化」の意味内容とその政治性

「大学体育における理論と実践の融合化」といわれる場合、それはこれまで、実践をある理論によって導こうとするような働きかけ、あるいは実践をある理論によって説明しようとする働きかけを意味するフレーズとして理解されてきたのではないだろうか。つまり、理論と実践の相互依存、循環関係のうちの特に一方を（先の図では下半分の過程を、また、「感覚は理性に先んずる」という側面ではなくて、「合理的実践は理論的認識によって方向付けられなければならない」といった側面を）強調した表現ではなかったか。だから、理論と実践の融合を志向した授業においては、たとえばジョギングは最大酸素摂取量の50%～60%相当の強度で行われることが正しいのであり、その快楽はストレス理論によって説明されなければならないのである。

ところで、このような体育・スポーツ現象に対する科学的説明の強調、「実技派」と「理論派」という体育教師自らがつくり出した体育教師の二分法的ラベリングは、「体育・スポーツ学」が「科学」としての社会的承認を獲得するための重要な一戦略あったと考えれば納得可能なように思われる。この意味では、「体育」における「理論と実践の融合化」という言説は、極めて政治的、イデオロギー的言説であるということができよう。

### 4. 実践感覚の批判的意義 = 体育の「知」

一番最初に提示した問題にもどろう。科学による導きと説明とを志向する体育の授業が、あまり評判の良いものではないように思われると先に述べた。それには様々な理由が考えられると思うけれども、身体経験の科学的説明が、「体育」という教科で体験してきた（いる）「感覚」を、うまく捉えることができていないということもその一つとして考えられるのではなからうか。つまり、スポーツや身体活動の経験が、決して「～ならば、～である」といったようなきれいな論理の世界になじまないような経験であることを、学生は、そして誰よりも「体育教師」自身が一番よく知っているということではないのか、ということである。

ここに来て我々は、「理論と実践の融合化」ということのもうひとつの意味内容について考えてみなければならない。つまり、実践を通じた感覚的な認識が、既存の理論を否定したり更新したりするという意味での「融合化」についてである（先の図の上半分の過程）。なおここでは、厳密な科学論的な議論にはあまり拘泥せずに、より守備範囲を広くして実践感覚の有する様々な可能性や意味について考えてみたい。これまでせいぜい科学的説明の対象としてしか位置づけられて来なかったそのような実践感覚に、何らかの積極的な意義を認めることが可能であるとするなら、それを「体育の『知』」と表現することは許されるだろう。

さて、これまで幾人もの研究者が述べてきたように、体育やスポーツ研究は、その時代時代の社会問題に対する貢献という観点から社会的な承認を取り付けてきた（このような事態は、「社会変化に対する研究の追従・補完的役割」などと表現されてきた）。また、先

に検討した「理論と実践の融合化」を志向する授業においては、こうした傾向がますます顕著になりつつある（このことの背後には、「大学体育の危機意識」が潜在していると思われる）。さらに、本研修会の「開催要項」には、「・・・多様化する学生のニーズ、並びに社会および職場の要望等に体育が今後どのように応えていくかといった観点は無視できるものではなく、『満足度の高い授業をどのように展開していくのか』といった教育プログラムの重要性が指摘されています」と述べられてもいる。

ところで「体育」は、結果的にはこれらの社会的要請に応えるよう機能するとしても、あるいはそうあるべきだと求められているにしても、我々の「体育経験」は、必ずしもこの範囲に収まらないし、そこから逸脱していくようなものでさえある。つまり、「体育の経験」はある種の「掟破りの快楽」を我々に提供しているということさえ実は可能であると考えられる。

たとえば、

- ・先生と生徒、男と女、先輩と後輩、などといった社会的な境界の崩壊
- ・頻繁に生じる身体接触と暴力
- ・抑制のない感情の表出（泣いたり叫んだり・・・）

必用とされているのは、体育の社会問題に対する補完的役割を強調することばかりではない。我々が適応を求められている今日の社会とは一体どのような社会なのかということの検討が、同様に必用とされているのだ。

考えてみれば、「学校週5日制」や「ゆとりの教育」、「総合的な学習の時間」が主張されはじめた背景には、効率第一の社会編成に対する反省があったはずである。そうであれば、「体育」には、そのような社会や制度の有する矛盾、問題を補完する役割ばかりではなく、人々の身体や自然環境に対する感覚的認識を媒介とした、社会、制度の批判という役割も同様に期待されているのではないかと考える。こう考えると、先に示したような体育における「掟破り」の経験は、そうした批判を可能とする足場になり得るように思われてくる。近年注目されている「からだ気づき」、「からだほぐし」と呼ばれるような体育の実践も、このような社会批判の観点からその意義が理解されるべきであると私は考えている。これが実践感覚の批判的意義ということであり、「体育の『知』」と表現したいことの内実である。「体育における理論と実践の融合化」というフレーズを、このような社会、制度批判の意味も付与されているものとして捉えたい。